『平家物語』における平清盛の人間像

Image of Human Being of Taira no Kiyomori in *Heike Monogatari*

笠井　哲
福島工業高等専門学校一般教科
Akira Kasai
Fukushima National College of Technology, Department of General Education

（2012年9月3日受理）

The various human being groups are drawn in *Heike Monogatari*. Above all, Taira no Kiyomori who is the leader of the Heike School is the outstanding exisitence that is distinguished at various points.

The purpose of this paper is to consider the image of human being of Taira no Kiyomori in *Heike Monogatari*. He is drawn as the human being having the two aspects namely truth and falsehood, good and evil. I want to grasp Kiyomori in the times called his live in the late ancient times. The image of a human being of Kiyomori has two aspects of the good and evil. He is an owner of strong personality. *Heike Monogatari* drew the image of human being of Kiyomori who lived in a transition period.

Key words: Taira no Kiyomori, *Heike Monogatari*, image of a human being, two aspects, good and evil

1. はじめに

古代末期における源平両氏の争乱を描いた『平家物語』は、皇族・貴族・僧侶・武士たちという様々な階層に属する多数の人物を登場させ、多彩な人間群像を造形して見せている。その中でも、平家一門の棟梁である平清盛は、種々の点で、群を抜く際立った存在となっている。

清盛は、『平家物語』冒頭で、すでに本朝・異朝の古今にわたる名だたる反逆者たちとともに併記され、その驕慢と猛々しさゆえに、想像を絶する言語道断な行状を遺して滅んだ人物と規定されている。

すなわち、清盛の場合、その悪行による滅亡ということが、物語の巻頭において、すでに明らかに予定されていたといえる。しかも、作者は、平家一門の滅亡を招く悪行・非行のすべてを、究極的には、清盛の意志に発するものとして描くから、清盛の悪逆無道ぶりをことあるごとに糾弾し、これに断罪と筆誅を加えていく。要するに、傲慢放恣な独裁者、不忠不義な暴虐行為の実行者として、清盛を描くところに『平家物語』の作者の意図があるといえる。したがって、

> 『平家物語』の語る清盛のイメージはきわめて一面的であることが知られるのである[1)]。

といわれている。

しかし、また『平家物語』においては、一方で清盛の人間あるいは私人としての弱さ・善良さ・おかしさなどの一面をも、リアルに照らし出すことになっている。もちろん、清盛のこのような側面の描写は、作者の本来の意図することではないから、作者が清盛の悪逆な様相を描くその描写の中に、作者の意図に反し、期せずして、副次的に悪逆であるはずの清盛の善良さや弱さや優しさが、露出して来るといえる。

実は、ここに『平家物語』における清盛像の問題がある。悪逆無道な人物として描かれながら、その人物像が、かえって生彩を放つということが見られ、この事実が読者に強烈な印象を与えている。

これは、物語における人間描写にかかわる問題であるから、一義的には文学上の問題となるであろうが、別な方向から、清盛像に接近してみたい。第一に、清盛像の造形にあたり、作者の設定した枠組みが如何なる構造であったか、第二に、その枠組みを外れて露呈する清盛の他の側面にも光を当ててみる。

本稿の目的は、『平家物語』において清盛が如何に描かれているかを見ることにより、虚実・善悪の両面を含む清盛の全体的な人間像を取り出し、あわせて清盛を彼の生きた古代末期という時代や、その思潮との関連の中において捉えることである。

2. 清盛と重盛

清盛が、厳島の修造工事を終了した時、通夜の夢に天童が現れ剣を授け、「汝この剣をもって、天下をしずめ、朝廷のお守りとなれ」[2]と告げたが、その後、また大明神が現れ、「ただし悪行をしたら、栄華も子孫にまで及ぼすことは、できないであろうぞ」[3]という託宣があったという。

清盛の厳島神社修理は、事実であり、願文や納経も残っており、平家の厳島信仰を伝えているが、この物語にいう天童や大明神の託宣は、もちろん創作であり説話であろう。いずれにせよ、武士の出身である平家に、武威による天下平定と一門の繁栄が、託宣で約束されている。

しかし、その繁栄も「悪行」があれば、子々孫々までは保証されないという条件がついており、平家のその後の「運命」を暗示することになっている。

この平家の「悪行」を、物語は如何に描いていくのであろうか。『平家物語』の作者が、「是こそ平家の悪行のはじめなれ」とする「殿下乗合」事件（巻第一）をあげてみよう。

事件の概略を、『平家物語』によって見ていくと、以下のようである。嘉応２年（1170）10月16日、当時13歳であった重盛の次男資盛が、鷹狩りの帰途で、摂政・藤原基房の参内の行列と出会った。「殿下のおでましも問題にせず、一切下馬の礼をとることもなく、駆け破って通ろうとしたので、暗くなってはいたし、全然入道相国の孫とも知らないで、また少しは知っている者がいても、空とぼけて知らないふりをし、資盛朝臣をはじめ、侍どもを皆馬から引き落とし、たいそう恥をかかせた」[4]という事件が起きた。

逃げ帰った資盛が、六波羅の祖父清盛に事情を訴えると、清盛は大いに怒って、嫡男重盛の忠告・諫止をも聞き入れず、片田舎の侍ども多数を動員し、５日後の21日、基房の参内の途中を待ち伏せ、報復の挙に出た。その侍どもが、「さんざんにやりちらして悦びの時の声をあげて、六波羅へ参った。入道は『感心である』といわれた」[5]という。

この事件に関して清盛は、「たとえ殿下であろうとも、浄海の周辺をおはばかりになるべきなのに、幼い者に、何かの事もなく恥をかかせたのは、遺恨なことである」[6]といって、復讐心を燃やした。一方、これに対して重盛は、「これは、少しも気にすることはありません。頼政・光基などと申す源氏どもにばかにされましたような際には、確かに平家一門の恥もございましょう。重盛の子どもともあろう者どもが、殿下のおでましに出会って、乗り物から降りないのこそ無作法です」[7]と道理を説いた。

さらに、清盛の命令で、基房の行列に暴行を加えた侍どもを、厳しく戒めただけでなく、彼らを全員「勘当」し、当の資盛に対しては、「だいたい資盛がけしからん。栴檀は双葉より芳しといわれている。すでに12、3歳になろうとする者は、もう礼儀を心得てふるまうべきなのに、このように無礼を働いて、入道相国の悪い評判を立てる。不孝至極、責任はお前一人にある」[8]といい、しばらく伊勢国へ追放したという。

重盛のとったこの相応の処分について、「君も臣も感心なさった」[9]と、作者は締めくくっている。

この事件をめぐって、清盛と重盛とが示した対応の仕方には、著しい対照が認められる。清盛の態度は、太政大臣にまで昇進した自負と、思い上がりとを露骨に示している。孫が、公卿により屈辱を受けたことに発する私憤を晴らそうとして、公然と報復の挙に出たのである。ここで、清盛は伝統的な律令貴族に対して、行動によって挑戦していることになる。

これに対して、重盛は律令体制下における武士としては、公家に礼節を尽くすのは当然であるとし、非はもっぱら、下馬の礼をとらなかった資盛の側にあると主張する。源氏の侍どもから無礼を蒙るのは、武家として、平家一門の恥辱に価するが、相手が公家であれば、「すこしもくるしうない」と説く。これは、伝統的な律令社会における武士の位置をわきまえた、道理に叶う態度の表明である。

さて、この「殿下乗合」事件は作者の仮構ではなく、同時代の公卿の日記や歴史家の史書にも、記録が見えている。しかし、それらの実録によって、この事件の経緯を辿ると、『平家物語』の叙述とは相当な食い違いある。たとえば、この事件について、基房の弟・慈円の『愚管抄』にも記述がある。しかし慈円は、「この小松内府は、心ばえがたいへん正しい人で、父入道が謀反の心を持っているのを察知し、早く死んでしまいたいものだなどといったといわれている。しかし、そんな人がどうしたものか、父入道に教唆されたのでもないのに、考えられないようなことを、一度だけしている。不可思議なことを一つしたのである」[10]という。「不可思議なこと」とは、『平家物語』にいう「殿下乗合」を指している。

重盛を「いみじく心うるわしい」人物とする点では、『愚管抄』も『平家物語』と同様であるが、「乗合」

事件において資盛の蒙った被害については、「このことを深く根に持った重盛は、関白が高倉天皇御元服の準備に参内する途中を、武士らに待ち伏せさせて襲わせ、騎馬で、関白の行列の先導をつとめていた者をとらえ、髻を切り落とされたのであった」[11] と述べ、この復讐が重盛の執心から出たことを認めている。

では、『愚管抄』と『平家物語』とのこの隔たりは、一体何によって生じたのであろうか。いうまでもなく、それは『平家物語』作者の意図で、ありのままの史実に虚構が施されたためである。作者の仮構の意図は、「平家の悪行のはじめ」としての「殿下乗合」事件における、報復の張本人を清盛と設定することにある。この意図のもとに、作者は史実に意識的な作為を加えてまで、重盛と清盛とを入れ替える必要があった。

このようにして、清盛を、伝統的な律令体制と対決し、王朝以来の王法の権威に叛逆する人物として造型する。一方、重盛を王法の権威に臣服し、律令社会の道理に立脚して、不忠不義な父親の破格の行為を註止するため、父親の前に立ちはだかる息子として描く。したがって、重盛は常に道義の体現者であり、「悪逆無道」かつ専横放恣な独裁者的な行為者である清盛を裁断する批判者として、立ち現れる。

清盛の悪逆化、重盛の理想化というこの対照的構図は、『平家物語』を原則的に一貫しており、我々はここに、作者の政治思想・倫理思想の原型を見ることができるのである。そして、いうまでもなく、作者の立場は重盛によって代弁されている。

それでは、作者の立脚する基本的立場は、どこに求められるであろうか。その立場を支える基盤としての思想の内容とは何であろうか。この点に関して、次の「王法と仏法」において考察しよう。

3. 王法と仏法

王法に対する清盛の叛逆については、すでに「殿下乗合」の章で、「清盛がこのように思うままにふるまうのはよろしくない。これも世が末になって、王法のが尽きたからである」[12] と見えているが、後世清盛の悪評の最大の根拠となった王法への叛逆は、治承３年（1179）のクーデターである。清盛はこの年の11月、それまでに対立を深めてきた後白河法皇を、武力により鳥羽殿へ幽閉し、法王側および反平家の貴族を解官し、その空位へ平氏一門および親平家の貴族をあてがい昇進させた。

この事件に関する『平家物語』の記述を見ると、鳥羽殿へ参向し法皇を慰める静憲法印に、次のようにいわせている。「何事も限りのあることですから、平家は富み栄えて二十余年、しかし悪行があまり度を過ぎて、今にも滅びてしまうでしょう。天照大御神や正八幡宮も、どうしてお見捨てになるはずがありましょう。中でも君が頼りにしておられる日吉山王七社は、一乗守護のお誓いが変わらぬ限り、お読みになるあの法華経八巻の辺に飛びかけて、君をお守り申し上げるのでございましょう。害をなす者どもは、水の泡のように消えてしまうでしょう」[13] と。

ここで注目されるのは、皇室の権威の根源としての天照大御神の加護と法華経の功徳とが、強調されていることであり、それら王法・仏法とが、法皇を見捨てない限り、「凶徒」たる平家は、水の泡のように消えうせることが必定というわけであって、後の壇ノ浦における平家の入水を暗示している。

翌治承４年（1180）２月、清盛は高倉天皇の譲位を迫り、安徳天皇擁立に成功する。そして、６月には福原遷都を強行する。この遷都について、『平家物語』は、「平家の悪行については、全く頂点に達した」[14] と断じ、それに続けて、安元以来の平家による王法・仏法への叛逆の事例を列挙し、もう残る悪行は遷都だけなので、悪行の締めくくりとして、これを敢行したのだという批評を、心ある人の声として記している。

遷都が悪行の骨頂であるのは、「一天の君、万乗の主たる帝でさえも、お遷しになることができない都を、入道相国が人臣の身でありながらお遷しになった」[15] からである。これは、おそろしくもあさましい破格な行為であり、安徳天皇の即位後、「さしあたっての重要事である大嘗会などが、行われなければならないのをさしおいて、このような世の中の混乱の際に、遷都や内裏新築は全く不適当である」[16] というのである。

一方、重盛はこれらの事件に先立ち、すでに他界していた。したがって、これらの事件に見られる清盛の法に過ぎた「悪行」を、諫止することはできなかった。しかし、鹿谷における平家討伐の密議に参画した後白河法皇への報復として、清盛が法皇の幽閉を決意した時には、「道理」に立って「僻事」たる父の計画を諫止している。

重盛は、武装を法衣で包み隠そうとする清盛に向かい、「太政大臣の官職に上った人が、甲冑で武装することは、礼儀に背くのではありませんか。とりわけあなたはご出家の御身です。一体三世の諸仏が、解脱のしるしである法衣を脱ぎ捨てて、急に甲冑をつけ、弓

矢を持たれることは、仏教の方ではもはや戒を破って恥じないという罪をもたらすばかりでなく、儒教の方ではまた、仁義礼智信の法にも背きましょう」[17] と主張し、父の行為が儒教的道義に背馳し、仏戒を破砕するものであることを、正論に立って指弾している。

仏法に対する清盛の「悪行」は、彼の死に際の「悶絶躃地」と形容される、高熱にうなされた懊悩ぶりに、その応報をえていると見られる。

『平家物語』では、清盛の北の方時子が、清盛死去の直前に、「南閻浮提の金剛十六丈の盧遮那仏を焼き滅ぼされた罪によって、無間地獄の底にお落ちになるべき由を、閻魔の庁でお定めになりました」[18] との夢告を受けたことになっている。ここにいう「盧遮那仏を焼き滅ぼされた罪」とは、清盛の意志により決行された南都の焼打を指している。

清盛の下知を受けた重衡の軍勢は、興福寺の仏像・堂塔などを一瞬のうちに灰燼に帰せしめ、東大寺の大仏を、火焔に包んで熔解し、経巻一巻残らず煙と化し、おびただしい人々を焼死させるという、莫大な物的・人的損耗を与えた。その結果を知って、ひとり「入道相国だけが、怒りがはれてお喜びになった」[19] という次第であるから、清盛の仏法蹂躙は明白である。

以上に述べた再度に亘る平家の寺院焼討について、『平家物語』は、重盛による批判を載せていない。

清盛の死去に先立ち、入道相国重病の報が流れると、「京都中・六波羅周辺では『そりゃやった事だよ』とささやいていた」[20] という状態であったという。ついに、悪行の報いが来たぞという気配が察せられる。

古今に絶した「悪逆無道」の限りを尽くし、「悪行超過」した清盛であるから、今わの際となり、如何に「霊験あらたかな仏寺・神社に金銀・七宝などの宝物をどんどん捧げ」[21] お祈りしても効き目はなく、「仏教の大法秘法を尽くした効験もなく、神仏の威光も消え、天の諸神もお守りくださらない」[22] のであり、ついには「死んでしまうと、肉体は火葬にされた一時の煙となって、都の空に立ち上り」[23] というのである。

ここには、「日頃作っておかれた罪業ばかりが、獄卒となって迎えに来たのであろう」[24] といわれているのであり、悪因が悪果を招くという因果応報の理は、作者によって貫徹させられていることになる。

清盛の悪逆化と重盛の理想化、という『平家物語』作者の設定した基本的構図は、一方で清盛を仏法の仇であり、王法の敵であると弾劾し、他方で重盛を「仏教方面では五戒を守り続けて慈悲を第一とし、儒教方面では五常を乱さず礼儀を正しく行われる人」[25]、「人柄が端正で、忠心があり、才芸がすぐれて、雄弁と徳行とを兼ね備えておられた」[26] として称揚し、「上古にも末代にもめったにいない大臣」[27] と讃嘆することによって、成立するものであった。しかも、このような対比的構図が、もっぱら作者の文学的虚構に基づくものであることは、すでに見た通りである。

4. 清盛の性格

承安元年（1171）12月に清盛の女徳子が、高倉天皇の女御として入内し、治承２年（1178）11月に、皇子（後の安徳帝）のお産があったが、清盛は「これはどうしよう、これはどうしよう」[28] と、ただ途方に暮れうろたえるばかりであったという。やがて、「御産平安、皇子御誕生候ぞや」との報せが入ると、清盛は「あまりのうれしさに、声をあげてお泣きになった」[29] という。ここには、孫の出産を手放しで喜ぶ無邪気な好々爺ぶりが見られる。

清盛の情誼に篤い一面は、肉親に対してだけではなく、旧知の間柄にも向けられている。不遇のままに籠居をかこっていた中山行隆を、「あなたの父の卿は、何くれとなく相談した人なので、おろそかにお思いしてはおりません」[30] といい出仕させた。清盛の知遇をえた行隆の「家では女房たちが、死んだ人が生き返ったような気がして、集まって皆喜び泣きなどをなさった」[31] という。

また、不遇の貴族・徳大寺実定も、清盛の手で取り立てられた一人である。この場合は、清盛の崇敬する厳島明神への実定の参籠に対し、「特別にものに感激なさるたちの人」[32] である清盛が、感激した結果の褒賞人事である。知恵の働く貴族の巧妙な扱いを真に受けた清盛が、特進の昇任を与えたわけで、その単純な自己中心性は、戯画化されかねないが、「ああ全くすばらしい方策であった」[33] とあり、ここにも、感激性の強い清盛の好人物の側面を、窺うことができる。

清盛のこのような性格は、さらに敵に対する寛大としても現われる。第一は、平治の乱の終結後に、頼朝を斬らずに流罪処分としたことである。第二は、以仁王配下の長谷部信連の斬首を主張する宗盛を斥け、流罪としたことである。第三は、以仁王の遺児を宗盛の嘆願を容れ、出家させたことである。

このように情誼に篤い清盛は、恩の倫理を強調し、「恩を知るのを人と言うぞ。恩を知らぬを畜生と言うのだ」[34] といい、鹿谷陰謀に与した成親の忘恩をなじ

り、頼朝挙兵の報を受けた時には、その忘恩を責め激怒している。頼政の挙兵については、『平家物語』の作者は、これを成親の場合と同様に「つまらぬ謀反」として非難を加えている。

清盛が武将として活躍した時期の叙述は、彼が権力の座について以後の行状を描くことに主眼をおく『平家物語』ではあまり見られない。だが、清盛の父忠盛が、宮廷貴族に列して、はじめて昇殿する場面を描く「殿上闇討」の章には、形勢を見るに敏で、臨機応変の処置を取りうる新興武士の行動様式が示される。と同時に、武士集団内部で伝統的に形成されてきた、「武士郎党の習」としての緊密な同族団的結合、ないしは強固な情誼的主従関係が窺える。

清盛死去の治承５年（1181）からおよそ70年後の建長４年（1252）に成立した説話集『十訓抄』には、清盛が、その寛大な包容力と人の心底にまで届く繊細な温情とによって、部下を感銘させ、心服させずにはおかなかったことが語られている。

武人としての清盛には、この他に「殿下乗合」に見られるような、武力を頼んで一気呵成にことを運ぶ、武断的実力主義の傾向もある。また、鹿谷の謀議に参画した西光法師に対する「何かものを履いたままで、そいつの面をむずむずとお踏みになった」[35]との仕打ちには、直情径行を超えた粗暴な野人性が露骨である。

しかし、これはあくまでも外側の叛逆者・敵対者に臨む場合の猛々しさであることに、注意しなければならない。清盛を中核とする武士の同族団的結合の内部における、彼の集団統率者としてのあり方は、やはり『十訓抄』に語られているところと、大きな隔たりはなかったものであると考えられる。

そう考えないと、清盛が武士出身者として初めて太政大臣に昇進し、位人臣を極め、「人が従いつくことは、吹く風が草木をなびかすかのようである。世人が皆尊敬したことは、降る雨が国土を潤すのと同じである」[36]と評されるまでになり、さらに平家一門が、その「官位の昇進も、龍が雲に登るよりは、いっそう速やかである」[37]といわれたほどの、異例の繁栄を誇ることのできた理由を、十分に理解しえなくなるのではないだろうか。

もちろん、平家一門の栄華は、清盛一個人の力量によるのではなく、正盛・忠盛以来の、累代に亘る実力の培養をその背景とし、地盤ともしていたことは明らかである。清盛が、当時の宮廷・貴族・寺院等の諸勢力の複雑に絡み合う政治情勢に対処するにあたって、柔軟な政治的妥協性と協調性とを建前として、慎重かつ細心に、自己の行動を選択したものと思われるのであり、このような彼の卓越性が、一門の繁栄にとって、寄与するところ大であったといいうるであろう。婚姻政策による摂関家との連接、そしてついには、皇室の外戚の地位の確保などは、すべてその例証となる。

5. おわりに

『平家物語』における清盛は、重盛をその代弁者とするような作者の立場に基づいて、デフォルメを加えられ、一方的に悪逆無道な人間として造型されながら、しかもなお依然として、作者の設定した仮構のフレームから外へはみ出す面を有している。

清盛像は、悪逆化されることによって、かえって人間としてのふくらみを獲得し、あるいは神罰・仏罰を被るに価する叛逆者として、作者の筆誅が加えられるに応じて、逆に生彩を放つ場面が、『平家物語』にはしばしばあるからである。

このような視点からの照射を受けた、清盛の人間像は、善悪二面を一身のうちに併せ有する人間であり、生彩を放つ強烈な個性の持ち主である。清盛は、逞しくて脆く、猛々しくてやさしく、単純にして複雑、直情径行にして周到、衝動的で機略にすぐれ、激情的で繊細、冷徹でありながら温情で人を包む、というような二面性・両面性においてしか、捉えることのできない性格の人間である。

容易には融和し難いこれらの矛盾を内包するゆえ、清盛は常に行動的でありえた。彼は、決して運命に屈服せず、死に臨んでもなお、執念を燃やして、これに正面から挑戦したのである。

重盛が常に観察者であり、批判者であったのに対し、清盛は行為者であった。道義の体現者として立ち現われ、道理を踏まえたすさまじいまでの正論を、格調の高い雄弁と饒舌にのせ、説き来て説き去る重盛には、血の通わぬ、骨格だけの模型的な人間像を見る思いがする。重盛には、作者の仮託の負担がかかりすぎていた。逆に、清盛は、儒教・仏教などのあらゆる既成の教学の教化を受けない、無垢な自然児であった。

清盛が六波羅に構えた平氏政権は、六波羅政権ともいわれ、この平氏政権の性格規定ないし歴史的位置づけは、政治史の分野においても、いまだに定説がない。それは、古代的であり、中世的でもある。貴族政権でありながら、同時に武家政権の性格をも有している。いずれにせよ、このような平氏政権は、古代末期から

中世初期へまたがる過渡期の政権として、二面的な性格を有することになるのである。安田元久も、

平氏政権を古代的貴族政権のひとつと見るとき、それは、古代の終焉をつげる苦悩の中に生まれたところの独裁政権であり、また王朝国家の没落を前にして咲いたあでやかな仇花ともいえる。平氏政権を、武家政権と見るとき、それはまさに新しい時代の先駆者であり、中世をひらく苦悩の前史をいろどる短命の政権とすることができよう[38]。

といっている。

平氏政権をこのような位置においてみるならば、清盛の人間像は、さらに政治史的な背景を得て、いよいよその輪郭を鮮明にする。すなわち、清盛は、過渡的性格をもつ平氏政権の代表者として、一方で、古代社会の伝統的律令体制を肯定し、摂関家と姻戚関係を結ぶことにより、これと緊密に結託し、宮廷貴族の内部に深く入りこんで、太政大臣の位階にまで至った。

他方で、古代的な権威を否定し、律令体制に叛逆して滅亡はしたものの、中世社会の先駆となった。したがって彼の性格の二面性も、内包する矛盾も、すべて過渡期的特徴を集約して見せたものと解せられる。

『平家物語』は、まさにこの過渡期を生きる清盛の人間像を描いたのである。その清盛の人間像を、もっとも象徴的に示す場面を『平家物語』のうちに求めるならば、それは前述した次のようなところである。後白河法皇幽閉の計画を、重盛の諫止によって中止せざるをえなくなった清盛が、法衣の下に見え隠れする鎧をしきりに気遣っていたという、巻第二「教訓状」に描かれた場面である。『平家物語』では、「襖を少し閉めて、素絹の法衣を腹巻の上にあわてて着られたが、胸板の金物が少し外れて見えたのを隠そうと、しきりに衣の胸を引き合わせなさった」[39]という。

この場合、清盛においては、古代的な装いの下に、中世的な衣裳が、また心にもなく纏った法衣の下に、赤裸々な自然児が、素顔をのぞかせていたといえる。

五味文彦のいうように、

実力で政権を奪う時代としての中世を切り開いた人物こそ清盛であった[40]。

文　献

1）上杉和彦：平清盛，p. 4（山川出版社、2011）
2）『平家物語』からの引用は、新古典文学大系44『平家物語上』（岩波書店、1991）を現代語訳し、『平家』，p. 152のように表記する。
3）『平家』，p. 153
4）『平家』，p. 40
5）『平家』，p. 41
6）『平家』，p. 40
7）同前
8）『平家』，p. 42
9）同前
10）『愚管抄』からの引用は、日本古典文学大系86『愚管抄』（岩波書店、1967）を現代語訳し、『愚管抄』，p. 246と表記する。
11）『愚管抄』，pp. 246－247
12）『平家』，p. 39
13）『平家』，p. 192
14）『平家』，p. 266
15）『平家』，p. 269
16）『平家』，p. 271
17）『平家』，pp. 96－97
18）『平家』，p. 345
19）『平家』，p. 320
20）『平家』，p. 344
21）『平家』，p. 346
22）『平家』，p. 347
23）同前
24）同前
25）『平家』，p. 95
26）『平家』，p. 173
27）『平家』，p. 103
28）『平家』，p. 147
29）『平家』，p. 148
30）『平家』，p. 188
31）同前
32）『平家』，p. 118
33）同前
34）『平家』，p. 81
35）『平家』，p. 79
36）『平家』，pp. 12－13
37）『平家』，p. 12
38）安田元久：平清盛，p. 2（宮帯出版社，2011）
39）『平家』，pp. 95－96
40）五味文彦：平清盛，p. 315（吉川弘文館，1999）